

【石棒クラブ】

「かたち」からみた塩屋の石棒

長田友也（中部大学非常勤講師）

2022 年 11 月 3 日 於：塩屋公民館

はじめに

「石棒の聖地」として知られる塩屋金清神社遺跡は、遺跡名にもなっている金清神社と深い関係にあります。塩屋金清神社は、遅くとも江戸時代には男性器を祀る神社として広く知られていたそうです。そのご神体は木製の陽物ですが、祠には縄文時代の石棒も含まれています。近くにみられる塩屋石の柱状節理や、遺跡から出土する石棒未製品などが性にまつわる神社が建立された由来であるかもしれません。

こうした性器信仰が、どのくらいまで遡るのかは非常に興味深い点です。西岡秀雄博士による『性神大成』（1956 年）を紐解けば、日本列島各地の性信仰の多さに目を奪われます。その信仰の対象たる陰陽物は木製であることが多く、写実的な形状はまさに性器そのものを象徴するかのようです。こうした木製陽物は、近世・中世はもちろん、弥生時代にまで遡ることが知られています。塩屋金清神社遺跡が営まれた縄文時代にも「男根状木製品」とされる遺物もみられますが、類例に乏しく、建築部材などの可能性もあり、陽物信仰が縄文時代にまで遡るかは不明です。稲作文化の故郷である朝鮮半島には、こうした木製陽物が多くみられ、弥生時代以降に稲作と共に受容された可能性が高いと考えられます。

このように、現代にみられる性信仰と縄文時代にみられる石棒儀礼との、直接的な因果関係を説明することは難しいですが、ご神体としてまつられた石棒の存在から縄文時代以来の精神性が現代にまで息づいていると言えるかもしれません。

1. 塩屋金清神社遺跡と石棒

石棒製作遺跡として名高い塩屋金清神社遺跡は、平成 4 年（1992）・5 年（1993）の発掘調査により、1,000 点以上もの石棒・石棒未製品が出土したことで注目されました。

遺跡近隣で採取可能な塩屋石（黒雲母流紋岩質熔結凝灰岩の柱状節理）を用いて、剥離技術・敲製技術・研磨技術を複合的に駆使して石棒を製作していたことを明らかにした点は大きな成果でした（図 1）。これまで儀器（儀礼に用いる道具）として観念的に扱われることの多かった石棒を、石器として研究することの重要性を指摘した点で、石棒研究を大きく変化させた遺跡と言えるでしょう。平成 7 年（1995）には、『石棒の謎をさぐる』と題した縄文時代研究史上初の石棒シンポジウムの開催につながり、縄文時代研究にも大きな影響を与えることになりました。

その後、平成 12 年の報告書刊行を経て、

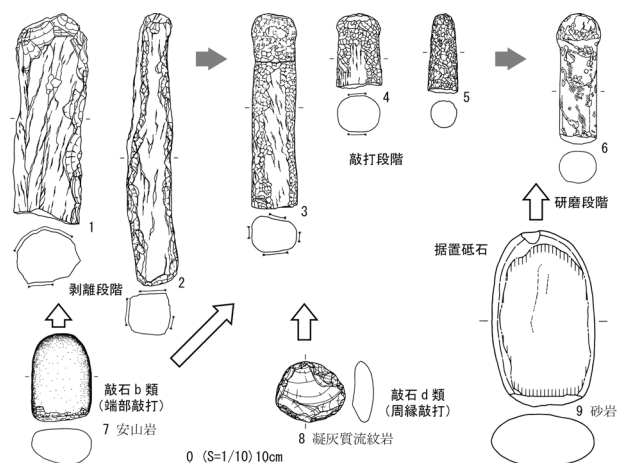


図 1 岐阜県塩屋金清神社遺跡における石棒製作工程

（林ほか 2000 より転載・作成）

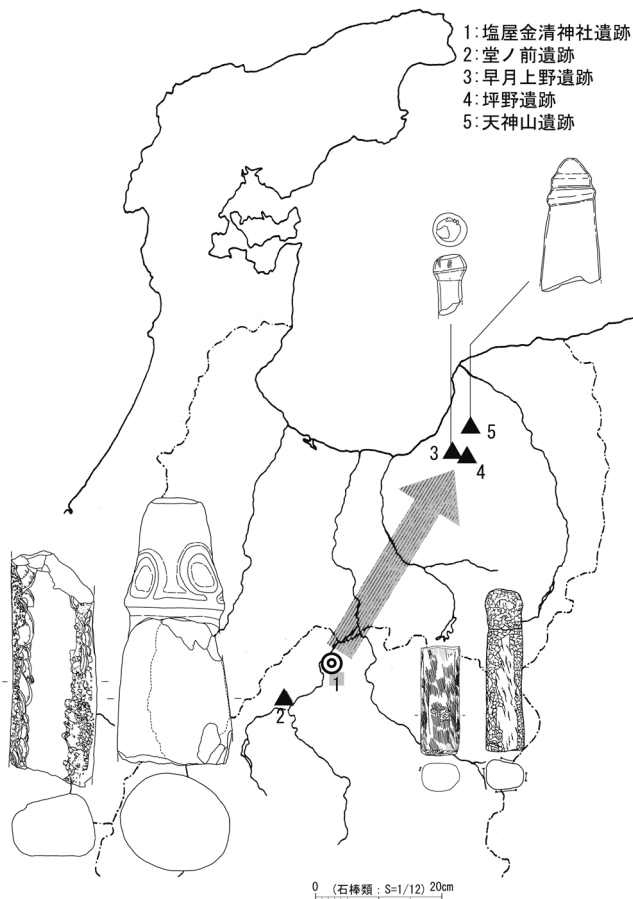


図2 塩屋石製石棒出土遺跡分布図
(山本 1996 より作成)

2. 石棒とは

ここまで幾度も登場してきた「石棒」について、簡単に触れておきましょう。

石棒は、縄文時代を代表する儀器であり、その形状が男性器に類似することから精神文化に関連する儀器として注目されてきました。一方で、その形態は多様であり、大きさだけを見ても手のひらサイズの小型のものから、1 mを超える大型のものまで様々みられます。多様な形態に分かれ、異なる形状・形態のものがあるということは、時期や地域の違いだけでなく、異なる道具、異なる儀礼に用いた様々な石製品を含んでいる可能性が考えられます。

具体的には、縄文時代早期・前期にみられる石剣、前期にみられる男根状石製品、中期にみられる石棒（大型石棒）、後期・晩期にみられる小型石棒・石剣・石刀など、多種多様な石製品が含まれます。これに石柱や立石などの自然の棒状礫や部分的な加工を施したものまで加わりますので、名称だけをあげても多種多様な石製品が含まれる可能性があり、石棒研究の混乱した状況がうかがえます。こうした定義・分類が不十分な点に、石棒研究の根本的な課題があるといえるでしょう。

令和元年（2019）からは「石棒クラブ」の活動に引き続き、石棒を介した新たなコミュニティの模索が実践されています。

さて、塩屋金清神社遺跡における発掘調査の成果は、先にあげた塩屋石を用いた石棒製作工程の復元と、製作遺跡で作られた石棒が遠隔地へと運ばれる点を指摘した(図2)ことにあります。これに大量の石棒の出土が重なり、石棒の聖地として位置づけられています。

一方で、作られていた石棒については、これまであまり言及されていません。縄文時代後期（紀元前 2300 年頃～ 1300 年頃）に生活していた縄文塩屋ムラの人々は、どのような石棒を作ろうとしていたのでしょうか。今回は、製作された石棒の「かたち」に注目し、どのような石棒を作っていたのかを検討することで、どのような意図で石棒を作っていたのか、どうして大量の石棒・石棒未製品が出土することになったのかを、考えてみたいと思います。

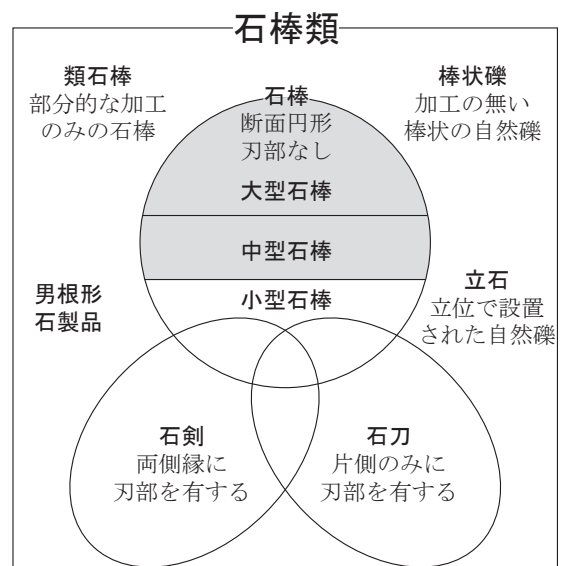


図3 石棒とその周辺の石製儀器の概念図

こうした現況をふまえて、「石棒」に含まれる多種多様な石製品を総じて、「石棒類」と仮称しています（図3）。

3. どんな石棒を作っていたのか

こうした多種多様な「石棒類」のうち、塩屋金清神社遺跡では、どのような石棒が作られていたのでしょうか。

石棒といえば、長大な棒状の磨製石器を思い浮かべる方が多いと思いますが、1m近くなることもある石棒（大型石棒）は、縄文時代中期後半（紀元前約2800年頃）にその最盛期を迎え、塩屋金清神社遺跡の最盛期である後期前葉（紀元前約2000年頃）は次第に減少する衰退期に入っていきます。代わって、後期に入って登場するのが小型石棒・石刀といった小型・細身の石製儀器です（図4）。したがって、塩屋金清神社遺跡の人々が製作意図していたものも、こうした小形の石製品であった可能性が考えられます。

これを証明するために、遺跡から出土した石棒の大きさ（長さ・幅・厚さ）に着目して、検討をしてみました。長さは製作意図していた石棒類の特徴を示す重要な指標ですが、遺跡出土品の多くが未製品（失敗品）であるため破損資料が多く、全体形状を読み取ることができません。そこで、多くの資料で計測可能な幅と厚さを検討してみました（図5）。これによると、塩屋金清神社遺跡で製作さ

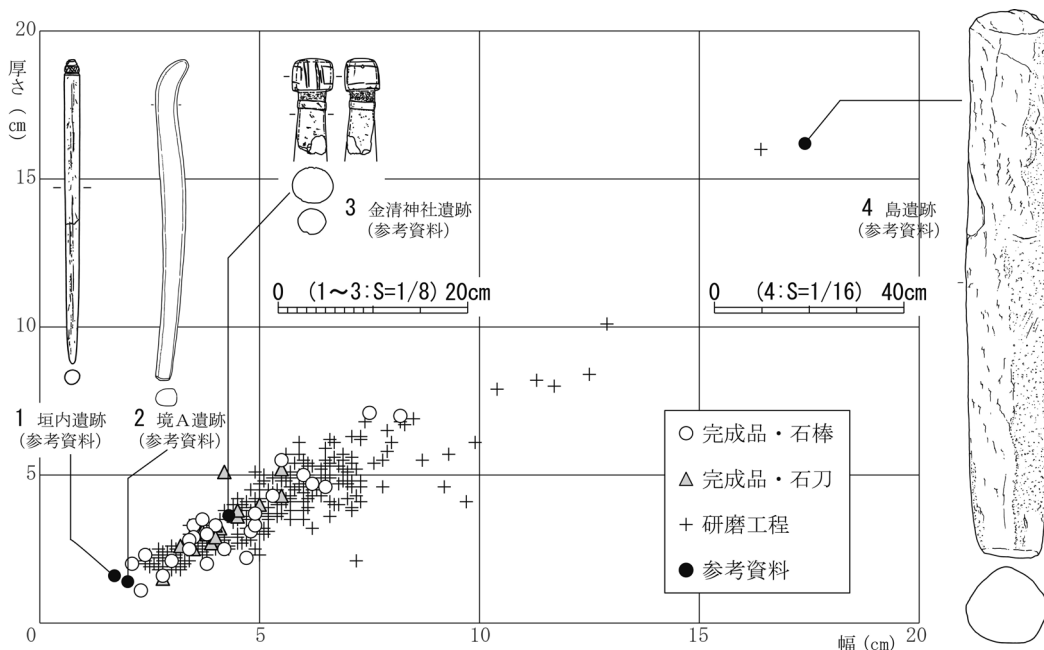
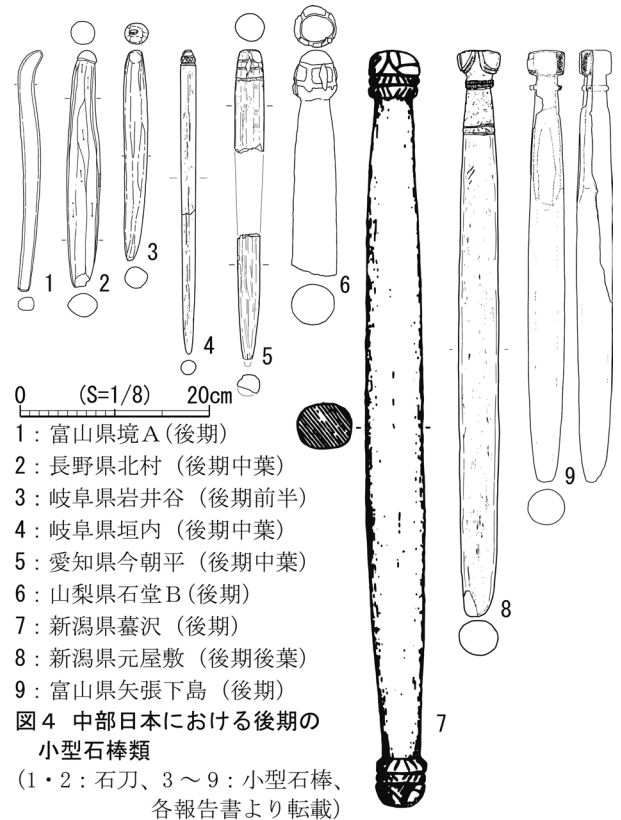


図5 岐阜県塩屋金清神社遺跡における塩屋石棒完成品・未製品および飛騨市周辺出土石棒の幅と厚さ
 (1: 小型石棒 (垣内遺跡)、2: 石刀 (境A遺跡)、3: 小型石棒 (成興野型石棒・金清神社遺跡)、
 4: 石棒 (大型石棒・島遺跡)、1・2・4は各報告書より転載)

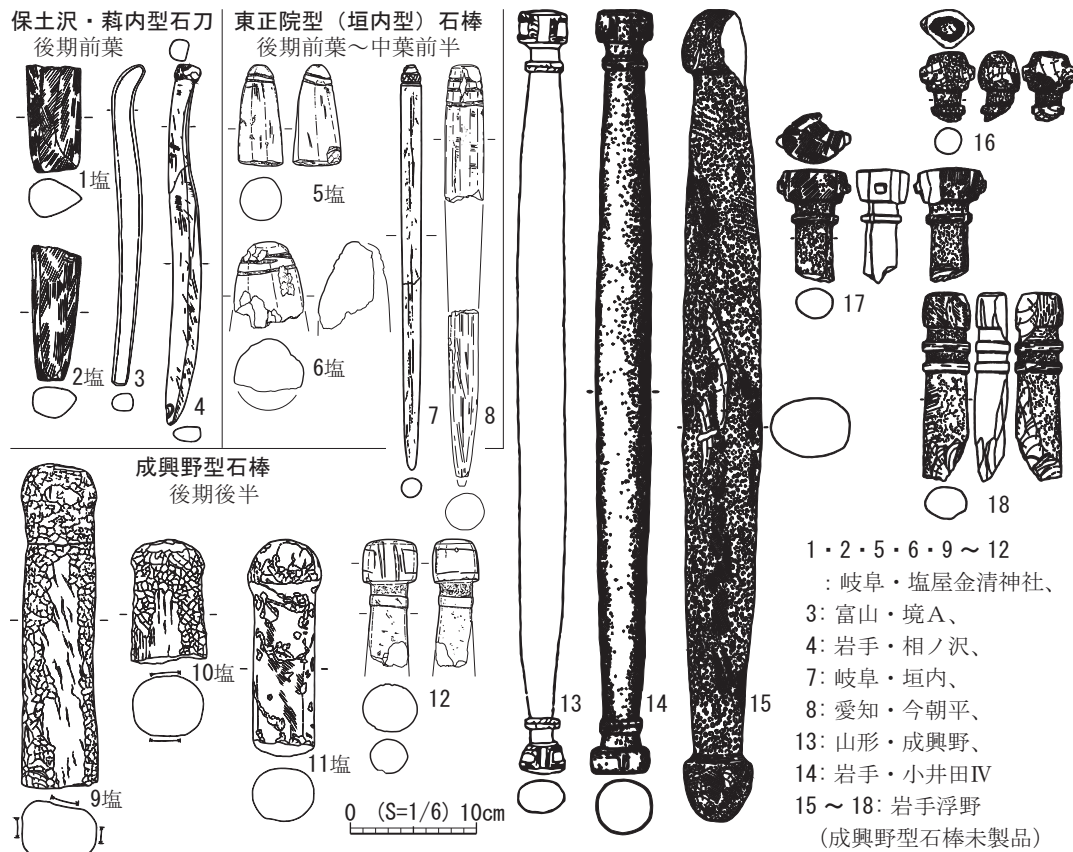


図6 岐阜県塩屋金清神社遺跡で製作される小型石棒類とその参考資料

(塩は塩屋石製、5・6・12を除き各報告書より転載)

れる石棒類の多くが、幅・厚さともに8 cm以下のものが多く、大型石棒の基準である10 cmを超えるものは、ほとんどみられません。資料の多くが未製品であり、さらに細くなることを考慮すれば、より細身の小型石棒や石刀を製作意図していたものと考えられます(図6)。これら細身の小型石棒・石刀は、関東地方や東北地方で多く出土し、製作遺跡も明らかになっており、その一例は塩屋金清神社遺跡からも出土しています(図6-12)。

4. 「かたち」からみた塩屋の石棒

以上のように塩屋金清神社遺跡では、後期に関東地方・東北地方を中心に広域に展開する小型石棒・石刀を模倣的に製作していたものと考えられます。これら小型石棒・石刀は、本来は扁平に割れやすい層理の発達した片岩類を用いて製作されるため、軟質で棒状の柱状節理である塩屋石では、胴部径5 cm以下と細身で、長さ30 cmを超える長大な石製品を作ることは困難であり、大量の未製品(失敗品)を産み出すことになったと考えられます。このように、石棒の「かたち」に注目し、作られていた石棒を理解することで、代替品としての塩屋石製石棒製作の実態が明らかになりました。遠隔地で製作され、入手の困難な小型石棒・石刀を模して塩屋石で製作する、そうした意図が読み取れるのです。

一方で、隣接する島遺跡では、中期後半の石棒(大型石棒)製作が明らかになっています。胴部径10 cm以上で長さ1 mを超す長大な石棒は、塩屋石に合致した石製品であり、広く宮川・神通川流域にもたらされたことは、従来の指摘通りです。「石棒の聖地」として縄文時代に知られていたのは、この中期後半における石棒製作であったことでしょう。そうした名残を知る縄文後期の人々が試行錯誤した結果、大量の石棒・石棒未製品(失敗品)を出土する塩屋金清神社という特異な状況を生み出したのではないのでしょうか。